

ファーストペンギン通信

第32号
発行日
令和4年12月15日(木)
発行人
八王子実践中学校
中学部長 石川敏史



©2015B.B.F.P.

令和4年12月7日(水)JR浜松町駅北口を出て徒歩6分のところにあるJR東日本四季劇場「秋」において上演されている「バケモノの子」を鑑賞しました。細田守監督のアニメ「バケモノの子」を劇団四季がミュージカルにしたものです。

主役の熊徹と九太だけでなく、脇を固める達者な俳優陣の熱演と熱唱で、あっという間に2時間25分がたっしてしまいました。

暖かい家庭に恵まれず、バケモノの世界で、熊徹を師匠と仰ぎ、修行をする蓮＝九太の成長物語です。特に、「自分とは何か、自分らしく生きる」とはどういうことなのかを私たちに問いかけてくれました。

クライマックスでは、九太と同じように心に闇を抱えた一郎彦とのバトルがストーリーを盛り上げました。自己犠牲もいとわぬ熊徹の九太への師弟愛以上の思いが聴衆の胸を打ったのです。

そして、参加者がこの作品を見て、何を感じ、どう思ったのかをお伝えしたいと思います。

芸術鑑賞教室 劇団四季ミュージカル バケモノの子

僕は「表現の方法」に感心しました。例えば、九太が人間の世界にもどった時の暗くて複雑な気持ち、その場面の情景によく合っていました。物語で使われる「情景」の技法を用いているようだった。

また、いくつかの照明を使うことにより、ただ目立たせるだけでなく、心情や雰囲気表現していて、とても感心しました。

熊徹と猪王山が最初に戦った時は、猪王山が勝つたけれど、9年間九太と修業した熊徹は宗師様を決める対決で勝ってしまう。9年間の努力はすごかったんだと感心しました。

しかし、一郎彦が熊徹の背中に刀を突き立てたとき、「それはないだろう」と思いました。ですが、闇に包まれた一郎彦を九太が助けに行ったところがかっこよかったです。

「人は闇を持ちながら生きていけないといけない。」というセリフを聞いて、やっぱりそうなんだと思った。でもそれを人にぶつけたらいけないのだ。

この他にも「素直に生きる。」とか「強くなるには時間がかかる。」などバケモノの子を見たからこそ考えられたことがあった。

私はセリフに注目して見ていました。全く同じセリフなのに最初と最後で意味が変わっていたり、言うキャラクターによって意味が変わったりしていて驚いたし、感動しました。私は、「胸の中に剣があるだろうがよ。胸の中の剣が大事なんだよ。」というセリフとか「誰かに決められた人生なんて偽物」とう歌詞とかが特に印象に残りました。なので、これからの人生に活かして生きていきたいです。

今回初めてミュージカルを見て、こんなにも迫力や楽しさがあるのわかりました。自分たちより年下の子が一生懸命にやっている事がすごいと思いました。

役で出演している人は体力を使うし、たくさん覚えることもあるのに一つひとつの場面を全力で取り組んでいました。

裏方の人もすごいと思いました。舞台のセッティングだったり音の調節だったり、鯨を持ち上げたりするのは本当に大変だからです。



熊徹と猪王山の対戦

©2015B.B.F.P.(撮影者:阿部章仁)